

# 「養老穴」取穴法の姿位の研究

中国中医研究院針灸研究所文献室 ダンユェンソン ファンロンシャン ランシャンチー  
譚源生 黄龍祥 冉升起

**要旨** 著者は、『針灸甲乙経』の経穴部位に関する文章の分析を通して、『針灸甲乙経』には独自の取穴の姿位があるのを発見した。そのことで明らかになった養老穴の取穴姿位を基礎として、『針灸甲乙経』が述べる養老穴の方位用語を正確に理解し、養老穴に対する中国と日本の取穴法の違いを明らかにした。

**キーワード** 『針灸甲乙経』、取穴法、取穴法の姿位、養老穴

## 1. はじめに

WHO西太平洋地域事務局主宰の経穴位置国際標準化のための会議は、現在多くの鍼灸業界の人々に最も注目されている会議である。この会議は今後の鍼灸の大なる発展につながる事業の1つとして重要である。納得できる、合理性のある、理解しやすい標準経穴位置制定になるよう、中日韓三国の諮問会議は現在、討論、協議を繰り返している。

ところで標準化制定の過程の中で、養老穴の位置に関して、中国と日本の草案に相違がみられた(韓国と中国の意見は一致)。2005年9月15日の中日の提出した養老穴位置の草案によれば、以下のようになる。

**【中国草案】** 前腕背側面で尺骨頭桡側の陥凹中。

注：手掌を下に向けて、1指を尺骨頭の最高点に押し当て、それから手掌を上回旋させ

(前腕回内位から回外位にする)、指が骨の陥凹部にあたるところ。

**【日本案部位】** 手関節後面で尺骨茎状突起下際の陥凹部の上1寸にある。

**【日本案取穴】** 尺骨茎状突起下際の陥凹部、陽谷の上1寸に取る。

上述の文本の表現を根拠に、中国案の養老穴と日本案の養老穴を示すと図1のようになる。

この中日両国の養老穴取穴法の違いは、『針灸甲乙経』の養老穴取穴法の異なった理解が原因であると考えられる。この異なる理解が生まれた原因は、『針灸甲乙経』の経穴取穴姿位に対する解釈の違いにある。本論は経穴取穴の際の姿位についての観点から、養老穴の正確な取穴法を検討するものである。

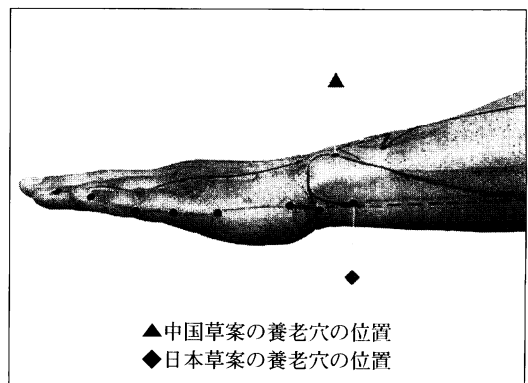


図1 養老穴の位置 (カラーアトラス取穴法<sup>1)</sup>より改編)

## 2. 同一部位の他の経穴について

養老穴を検討する前に、まず中日で異論のない経穴取穴部位を検討し『針灸甲乙経』の経穴取穴姿位に対する理解を深めてみよう。

「前谷：手小指外側、本節前陷者中」(『針灸甲乙経』巻三)

「後谿：手小指外側、本節後陷者中」(『針灸甲乙経』巻三)

「腕骨：手外側、腕前起骨下陷者中」(『針灸甲乙経』巻三)

「陽谷：手外側腕中、兎(銳)骨下陷者中」(『針灸甲乙経』巻三)

まず、上記例の経穴の部位表現から、『針灸甲乙経』で述べられている取穴時の姿位を検討する。上述4つの経穴部位の分析から共通することは、いずれも「手小指外側」あるいは「手外側」と述べられていることである。『針灸甲乙経』では、掌を下にした状態の肢位を基準として「外側」という一般的定義に基づいて、経穴を整理し表現しているのがわかる。

さらに、前谷と後谿を見ると、「本節前」と「本節後」という表現をそれぞれ使用している。これは、手掌は必ず水平位に位置することを意味する。そうすることによって前後の位置関係が表現できるのである。『針灸甲乙経』におけるいくつかの取穴姿位は、図2に示すような前腕と手掌は水平位・回内位であることが理解できる。

以上のことから少なくとも1つの結論が導き出される。『針灸甲乙経』で表現する経穴取穴法には決められた姿位がある。この姿位は現代的な解剖姿勢とは異なり、方位用語の使用は、常に一定の姿位に基づいていることがわかる。つまり、我々は経穴部位を確定するのであれば、

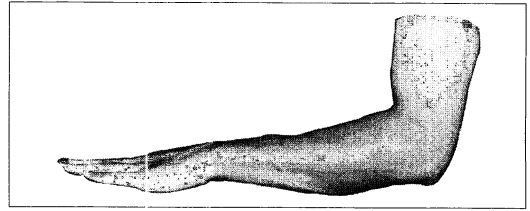


図2 前腕と手掌は水平位・回内位

まず本文中の方位用語を理解するのが必須であり、取穴時の姿位を明確にすることが必須である。

我々は『針灸甲乙経』では取穴時にある一定の決められた姿位があることがわかった。そこから我々が、さらに解決すべき問題は『針灸甲乙経』の取穴法が同一の姿位で行われているかどうかである。

二間：「手大指次指本節前、内側陷者中」(『針灸甲乙経』巻三)

三間：「手大指次指本節後、内側陷者中」(『針灸甲乙経』巻三)

合谷：「手大指次指間」(『針灸甲乙経』巻三)

陽谿：「腕中上側兩筋※間陷者中」(『針灸甲乙経』巻三)

※「筋」は元「傍」に作るが『太素』『医心方』『外台秘要方』により「筋」に改める。

二間と三間の分析では先ほど述べた原則方法が運用され、我々は取穴時の姿位を確定できる。すなわち、前腕と手掌は前と同様に水平位・回内位である。しかし合谷の記述表現では、「第二中手骨内側」に類似した表現は使用しておらず、「手大指次指間」と表現している。この問題は、合谷は、臨床では通常、前腕と手掌は図3のように中間位で行っていることに原因がある。

この時「第二中手骨内側」という表現は明ら

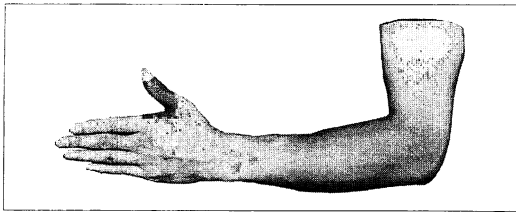


図3 前腕中間位

かに妥当でない。もし合谷の記述表現で納得できなければ、陽谿の姿位を分析し説明しよう。「陽谿、腕中上側兩筋間陷者中」と述べられており、ここでは明確に「腕中上側」と言い、「上」というキーワードは明らかに陽谿取穴の姿位を提示している。先に述べた二間と三間の取穴法は、「前腕と手掌は回内して水平位」であったのが、この場合「前腕と手掌が中間位」に変化している。

実際、この姿位にすると、十分に陽谿が現れるので、臨床で取穴をするのによく用いられる姿位である。

上述した数穴の取穴法の分析を通して、『鍼灸甲乙経』の取穴時の姿位は固定された不変なものではなく、それぞれの経穴の取穴には、それぞれの姿位を採用していることがわかった。

### 3. 養老穴について

養老：

「在手踝骨上一空、腕後一寸陷者中」(『鍼灸甲乙経』卷三、『銅人腧穴鍼灸図経』、『十四経發揮』)

「在手踝骨上一空、在後一寸陷者中」(『備急千金要方』卷二十九)

「在手踝骨上空一寸陷中」(『鍼灸資生経』卷一)

「在手踝骨上一空、在腕骨後一寸陷者中」(『普濟方』卷四百十三、『医学入門』)

「手踝骨前上、一云：腕骨後一寸陷中」(『鍼灸聚英』卷一、『鍼灸大成』)

「在手踝骨上有空、再後一寸陷中。広注：合居陽谷後一寸五分」(『循経考穴編』卷上)

「在手外踝骨上一空、腕後一寸陷中」(『類経図翼』卷六)

「從陽谷上行、手下銳骨上一空、腕後一寸許陷中」(『医宗金鑑・刺灸心方要訣』)

上記の内容から、歴代の養老穴に関する文献は、基本的に一致し、みな『鍼灸甲乙経』の「手踝骨上一空、腕後一寸陷中」に従っている。しかしながら、中日の取穴法が異なる原因は、『鍼灸甲乙経』の「手踝骨上一空、腕後一寸陷者中」の理解の違いにある。

先ほどの取穴原則を応用して考えると、「腕後一寸陷者中」の表現は、養老穴を確定する時、前腕は水平位で、さらに前腕の姿位には図4、5、6に示したように3種類あることがわかる。

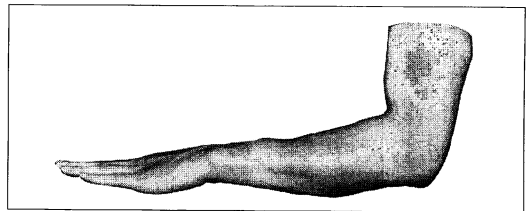


図4 前腕回内位

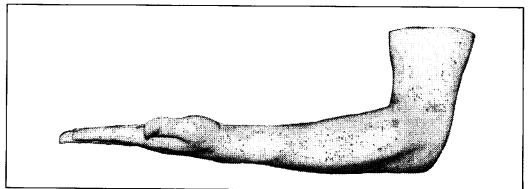


図5 前腕回外位

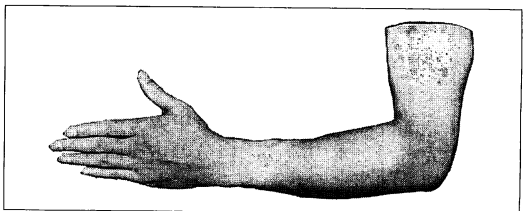


図6 前腕中間位

もし、図4の姿位（回内位）ならば、養老穴は尺骨頭の上下という位置関係がなくなり、しかも通常の取穴法の習慣には合わない。

図5の姿位（回外位）では、文献を根拠とした養老穴の尺骨頭の上下位置関係記述を見ることはできるが、図7の★印に示す通り、尺骨頭の上下関係は、経穴位置が手掌の内側面に位置することになり、心経の循行部位に属することになる。明らかにこの部位に取穴することはできないことがわかる。

結論を言えば、図6の姿位に示した前腕が中間位で、はじめて合理的な上下関係を捉えることができ、まさに、これが中国の養老穴の取穴法による部位である。

日本の養老穴の取穴部位（図1に示す）の相違の原因は、方位用語「上」と「後」を同一姿位で理解していったことにある。

『針灸甲乙経』の「手踝骨上一空」を理解するには、前腕は「中間位」で、「腕後一寸陷者中」を理解する時は、前腕は「水平位」に取穴姿勢の位置変化がなされる。このような手順を踏まえて『針灸甲乙経』の「手踝骨上一空、腕後一寸陷者中」の内容がほぼ満足されるのである。ただし、この方法は実際には異なる座標軸で方位用語を理解することであり、方位用語を使用する一般原則にも、また『針灸甲乙経』の体例にも合わない。最も重要なことは方位用語

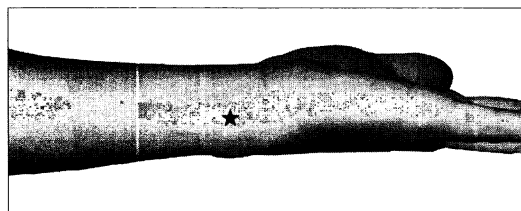


図7 ★には取穴できない

の明確性を取り消してしまうことである。

養老穴の取穴部位を通して、我々が啓発されたのは、古人を尊重し、深く分析して、やっと正しく古人を理解できるということである。

#### 【参考文献】

- 1) 形井秀一編, 山下詢著. カラーアトラス取穴法. 第2版. 医歯薬出版. 2002: 19
- 2) 晋・皇甫謐. 針灸甲乙経. 呉勉学刊医学六経本
- 3) 唐・孫思邈. 備急千金要方. 人民衛生出版社影印江戸医学本. 1955
- 4) 宋・王惟一. 銅人腧穴針灸図経. 明正統八年石刻拓本
- 5) 宋・王執中. 針灸資生経. 元天曆葉日増広勤書堂印本
- 6) 元・滑寿. 十四経發揮. 寛永二年刻本
- 7) 明・朱橚等. 普濟方. 人民衛生出版社排印本. 1983
- 8) 明・高武. 針灸聚英. 嘉靖十六年陶師文初版本
- 9) 明・李樞. 医学入門. 上海錦章書局石印本. 1941
- 10) 明・楊繼洲. 針灸大成. 清順治14年李月桂重修本
- 11) 明・張介賓. 類経図翼. 人民衛生出版社据明金閏童湧泉刻本校勘重鉛印本. 1965
- 12) 明・撰人不詳. 循経考穴編. 清康熙抄本
- 13) 清・呉謙. 医宗金鑑・刺灸心方要訣. 人民衛生出版社排印本. 1981

(北京東直門内南小街16號

中国中医研究院針灸研究所 010-64014411)

#### 譚源生氏の論文掲載に寄せて

WHOの経穴部位標準化会議に譚源生氏が参加されていた縁で、養老穴の論文を日本の雑誌に投稿できないか相談を受けた。譚氏は黄龍祥氏の弟子で、将来の中医学を担う若手の1人である。

本原稿は、譚氏が中国の友人に日本語訳してもらったものを小林健二氏とともに形井が校正し、一部、訳したものである。日本の読者に分かりやすく表現を直したところはあるが、内容を変更した点はない。

経穴部位の標準化作業は日中韓で多くの時間と労力を費やして行われているが、このような形で中国の研究者が日本の読者に自分の古典研究の成果を問う論文が生まれたことは、研究の広がり、今後の日中韓の関係に意義のあるものと考えられる。

(筑波技術大学健康科学部健康学科鍼灸学専攻 形井秀一)